

<性暴力の被害にあう>ことをめぐる理論的パースペクティブ再考

大阪府立大学人間社会学研究科 伊藤良子

1 目的

日本では、とりわけ80年代以降活発に、民間の女性支援団体、性暴力被害当事者、各種専門職、研究者など様々な立場から性暴力の社会問題化が進められてきた。本報告では、<性暴力被害にあう>ことをめぐるフェミニズムの言説と、それに続く心理学、医学、社会学、法学などの各学問領域から行われた議論を整理することで<性暴力被害にあう>ことをめぐるまなざしの変化を追い、積み残された課題を明らかにすることを目的とする。

2 方法

80年代以降、日本の性暴力の社会問題化を推進してきた民間の女性支援団体、性暴力被害当事者、各種専門職、研究者たちによって展開された<性暴力被害にあう>ことをめぐる言説活動の過程をたどる中から論考を立ち上げる。女性学、心理学、医学、社会学、法学などの各分野で行われた性暴力の研究、性暴力被害当事者による著書などの言説活動において、<性暴力被害にあう>ことをめぐって議論された様々な理論的パースペクティブを整理する。とりわけ、女性学分野の研究ではフェミニズムの視点からの性暴力の認識枠組みの変換を目指した言説に、心理学と医学分野の研究では性暴力被害による心身への悪影響と支援の重要性を提唱した言説に、社会学分野と当事者の語りでは構築主義の視点とナラティブによる性暴力被害ストーリーの書き換えをめぐる言説にそれぞれ注目する。

3 結果

第二波フェミニズム以降、性暴力の認識枠組みは様々な知が混流する形で大きく転換した。フェミニストの女性たちは、性暴力を女性に対する人権侵害の問題として位置づけ、女性を性的自己決定権をもった主体として立ち上げた。90年代には、各専門分野の支援者が性暴力被害者の声を代弁する形で「集合の知」に基づく議論を展開した。特に心理学の分野からトラウマ、PTSDなどの概念が登場し、性暴力被害による影響は深刻で、被害者は長期的に深い心の傷を抱えることが強調された。2000年代に入ると、深刻な性暴力被害の影響からの回復には、被害者がトラウマ的な体験を支援者に開示し、支援を受けることの重要性が強調された。特に心理学や社会学の分野では、被害者が自らの被害体験に新たな意味を付与し、物語を書き換えることの意義が議論された。2000年代後半には、これまで、支援者によって「脆弱な被害者」として語られてきた「集合の知」に反駁する形で、当事者が「被害を受け、回復し、乗り越える」ストーリーとして自らの被害体験を語るようになった。

4 結論

現在、世間に流布している<性暴力にあう>ことをめぐる言説の多くは、各専門分野の支援者たちが当事者の声を代弁する形で「集合の知」として紡ぎだしてきたものである。「語れる当事者」の登場によって<性暴力被害にあう>ことをめぐる物語の「複数性」が暗に示されたものの、今後一人ひとりの他者に規定されることのない<性暴力被害にあう>ことをめぐる物語が丁寧に紡ぎ出される必要性が示唆された。

文献

伊藤良子 (2013) 「ミニコミにみる性暴力の社会問題化」女性学年報、34、pp.67-87